

「無開催試合」

坂口 裕靖

今年の春場所、すごかったですね。そもそも普段相撲は見ないので、例によってゼンロクされていた千秋楽を一通り見て、ちょっと感動しました。そもそも無観客で行われたのですが、無観客なのに裏方さんが沢山いることに驚きました。客席こそ空ではありましたが、通路にはぎっしりと関係者がいて、こういった催しを実施することがいかに大変なのか、まざまざと感じ取ることができました。最後に八角理事長があいさつする場面。原稿の冒頭、「本日…」と言いかけたところで突然口をぎゅっと結び、手にした原稿を凝視しながら、一瞬カメラを睨むようにして黙り込むこと約10秒。その後「千秋楽を迎えることができました」と続いていきました。

他の様々な舞台や大規模イベント、興行などがことごとく自粛する中、「迎えること

ができた」という文字列が目に入った途端、最後まで無事に開催できたんだ、という実感が湧き上がり、感極まってこのままではいかんと思ったのでしょうか。その動揺を表に出すまいと、ギュッと口を結んだ姿がなんと人間的で、印象深い場面でした。今回の無観客試合にこぎつけるまでの様々な困難・課題、そしてそれらに対処してきた日々。ここで罹患した力士を出してしまった時、何を言われるかを考えると、薄水を踏む思いだったのではないかと思います。実際裏方さんのあの人口密度と人数を見た時に、観客にこそ配慮はすれ、関係者にとっては三条件を満たした環境だったのではないのでしょうか。関係者が感染するリスクをおかしてでも春場所実施を選択したわけですから、covid-19がいかに深刻かを踏まえた上で賭けに出て、無事に千秋楽を迎

えるという勝利を手にし、感涙にむせばない方がおかしいくらい。それをぐっとこらえて、何事もなかったかのように淡々と原稿を読む姿にじびれました。

今回の春場所は一般の来場者に対する配慮ということで無観客試合になったのかと思います。同様の施策は他のプロスポーツでも実施されており、実施しないよりは無観客でも実施するという一つの判断が出ていると言えます。まあしかし、大量の観客がいるから目立たないだけであって、実際には無観客の試合であっても、それなりに沢山のスタッフがその試合を支えており、加えて取材陣や中継スタッフなども加えると、そもそもこれら関係者にとっては三条件が成立する現場に突っ込まれることになるわけです。幸い不特定ではない多数でしょうから、なんらかのスクリーニングにより

One Point BUZZ WORD

カイゼル

リモートワークで自宅作業してる関係上、そもそもあまり外に出る機会もないため、ヒゲを適当に伸ばしてみることにしてみました。復活の日ごっこというところですか。最初は髪の毛も伸ばし放題にしてたのですが、流石にこちらの方は面倒なのでやめました。一方ヒゲの方は、従来のアゴ部分に加えて口ひげ部分を伸ばしてみました。

今までなんでカイゼルヒゲはあんな形をしているのだらうと思ってたのですが、実際にヒゲを生やして生活してみると理由が分かりました。衣装を着て生活してみるという黒澤監督のメソドロジーの正しさを図らずも確認できた感じです。

実際には顔の肉付きとか唇の形、ヒゲの生える方向によって違うかもしれませんが、すくなくとも筆者の場合、唇の両端部分

に伸びてきた口ひげがあたって、ちょっとザワザワします。さらに飲食の際、ヒゲが積極的に絡まってくるのです。カイゼル髭のあの形のポイントは、唇の端、口の中にヒゲが接触・侵入してこないように形を整えるということのようです。見た目問題もあるのですが、実用上結構重要かもしれません。一方で、「おちょこ」は口ひげと干渉しないサイズになっており、非常に合理的です。

口ひげにおけるもう一つの問題は、鼻をかんだ場合、鼻水が口ひげの鼻孔直下部分にこびりつくというか染み込むというか、という状態です。これがなかなか拭き取りきれず、結構やっかいです。一方で紙との接触をヒゲが担当してくれるため、アブラを紙に吸われることもなく、たくさん鼻をかんでも鼻の下がヒリヒリしないのは意外と便利でした。まあでも、鼻水コーティングの方が厄介で、総合評価はマイナスと言ったところでしょうか。これが極寒の地であれば、呼吸による凍傷問題とかもでてくるのかもしれませんが、とりあえず埼玉では大丈夫、というか検証不可能でした。

スクを減らすことはできるでしょう。症状がでれば除外することはできるでしょうが、症状がない場合には防ぎきれません。本質的に改善しようとする、無観客どころか無試合にするしかないでしょう。

例えば、オムロンはCES2019にて、卓球ロボ「フォルフェウス」を発表しています。デモとしては人間の相手をしてたわけですが、これを人間の相手をするのではなく、「目の前」の選手と同じ動きをするようにしたらどうでしょうか。そして、目の部分とラケットの部分を分離して別の場所に置くわけです。これができるなら、別の場所にいる二人の選手が試合をすることができるかもしれません。同じ場所にその二人がいるわけではないので、これって無試合と言えるのではないのでしょうか？ 仮想卓球の試合というわけです。

スポーツライミングなどの単独選手によるスポーツの場合、無試合化することはある程度容易でしょう。全く同条件の壁を用意することは資金的に難しいのかもしれませんが、このあたりは出力するプリンタの問題に還元可能なはず。そもそも現状でも滑り止めの付き方などにより全選手が完璧に同じ条件で実行できてくるわけではないのですから、なんとかなるんじゃないでしょうか。それ以前に、大量の選手を一箇所にあつめるコストとどちらが高く付くかは微妙な問題かもしれません。

1対1ぐらいまでならこういった仕組みでなんとかなるとしても、多対多の試合を実現するのはかなり困難でしょう。一人のプレイヤーと21台のコピーロボットからなる試合インスタンスが22組、同時実行で繰り広げる仮想サッカーが実現できたとして、その全22組におけるボールの位置はきっちり同じ場所になるように制御可能なのでしょうか？ さすがに無理っぽい気は

しますが、まあある程度の誤差を許容することで、なんとかなるのではないのでしょうか。14面のプールで繰り広げられる仮想水球の場合、水面をどうやって再現するかが鍵になりそうです。計算がややこしそうですね。一番やっかいそうなのは仮想ゴルフかなあ...n個のゴルフ場を寸分違わず作り出すのは大変むずかしい問題であることが予想されます。温度が違えば音速も異なり、当然飛跡も違ってくるはずなので、条件を揃えるのは至難の業でしょう。というか、ゴルフの場合は同じホールを同時に使うのは一人だけなので、そもそも仮想化する必要性自体が大変希薄ではありますが。

一流のアスリートが行うスポーツの見どころは、そこらのヒトでは真似のできないような高度なプレイが目の前で繰り広げられるところにあるでしょう。それが国際的なレベルの大会であれば、人類の到達可能な地点を垣間見れるかもしれません。人類という種が、100mを走り切るのに果たして何秒必要なのか。10秒という壁は本質的なのかどうか。9秒を切ることは不可能なのか。こういった競技それぞれがもたらす限界値と、それを突破する瞬間を目の当たりにするかもしれない、といったあたりはスポーツ観戦の醍醐味の一つでしょう。そうした限界突破もふくめて、試合が終わるまで何が起るか誰にもわからない、という点はコンテンツとしてのスポーツが持つ強さです。マッチメイクさえできれば、そこでどちらがどういう形で勝つのか負けるのか、完璧に予想することは不可能です。したがって実施してない試合については、その試合が終わるまでの間、ネタバレの心配なくコンテンツ価値を維持することが可能です。これもひとえに、「過去のことは知っているが未来のことは知らない」という、現実が持っている不思議な性質のおかげで

す。

今回 TOKYO2020 なオリンピックは2020年に実施されないことが濃厚になったわけですが、covid-19がなかったとしても、夏の暑さと大腸菌が大会運営を大いに苦しめたことでしょう。締め切りが1年伸びることでこのあたりの対策がどう充実するかは興味あるところですが、まあ熱力学の原理を曲げることはできないので、夏に実施しようとする限りにおいては困難さが緩和することはないでしょう。ま、ここまで色々おこると、歴史的な大冷夏とかで暑さ問題が一気に吹き飛ぶ事態が発生するかもしれません。

ど延期が決まった翌日3/25の朝、川越駅に設置してある「川越市でゴルフ競技が実施されるまであと何日」パネルがどうなってるか気になって確認しに行きました。延期は決まったけどいつまでかはわからないので、パネルが廃棄されてしまうんじゃないかと思ったわけです。しかしながら、パネルは破棄されることなくいつもの位置に設置されており、しかも「あと127日」としてきちんと提示されていて、ちょっと安心しました。今後開催日が決定した段階で、日付を修正の上使い続けて欲しいものです。

なお、2020年2月末にオリンピックマスコット「ミライトワ」（青い方のやつ）の像が西口ペDESTロリアンデッキに設置されたのですが、この日は心持ち寂しそうな表情をしているように見えました。

Hiroyasu Sakaguchi
株式会社 IMAGICA Lab.